

日本人留学生の異文化感受性の変容

武 田 礼 子

1. はじめに

2017年度に本学で始動した成城国際教育プログラム (Seijo International Education Program、以下 SIEP) に登録し、国際交流科目^{シエップ}を受講して、2018年度後期より交換あるいは認定の長期留学で海外に赴いた SIEP 第一期生が 2019年度後期に帰国した。既に 2013年度より Academic Skills などの英語の語学対策科目群、Japan Studies や Special Topics など英語の科目群は開講されていたが SIEP の始動と同時に 2017年度前期よりコア科目の『留学準備演習』(半期科目)が新規開設された。

『留学準備演習』の土台を成す異文化コミュニケーションとは外国で開発された学術分野であり、それを日本人に当てはめるのが適切なのかという疑問も残る。しかし留学前に語学力を身につけるだけで十分と考える学生が多い中、理論に基づき実践を通して、最低限必要と思われる異文化コミュニケーションの概念を、留学を目指す受講生に紹介することは必須と考える。そうすることで渡航先での新しい環境に少しでも適応しやすい素地が留学前よりできる。同時に『留学準備演習』には、過去に留学した本学生の知識や経験も反映した内容、またそのような元留学生の声を受講生に伝えるという重要な役割も担う。そこで Bennett (1986, 2011, 2013) の異文化感受性の発達モデルに基づき、日本人を対象に山本 (2014) が行った異文化感受性の発達の調査を、留学経験のある本学生に対して実施し、その調査結果を明らかにする。2017年度後期より長期留学した本学生 13 人が質問紙調査に参加し、うち 4 人は面談調査にも協力した。本研究では、調査に参加した本学生の留学開始前と終了後の異文化感受性の変容を比較し、分析した内容を『留学準備演習』に反映させるなど、可能性を探ることを目的とする。

2. 異文化感受性の発達モデル

グローバル化の後押しがあり、国内外の諸大学では国際交流が盛んに行われている。留学する機会を通して、外国語習得や異文化交流を経験することで世界に目を向けるようになる学生もいれば、外国語の上達が見られず、国際交流にも興味を持たずに帰国する学生もいる (Jackson, 2018)。

留学予定の学生に対しては、渡航前より異なる文化や世界観の指導が必要であり、それから行動様式のトレーニングを実践すべきと Bennett (2013) は提唱している。異文化コミュニケーションの指導法として、大学において最も多く活用されているのが教室モデル (Chen & Starosta, 1998) だと言われるが、教室という環境と、異文化の中で実際に身につける知識の差を埋めるには不十分だという問題点もある。そこで中村 (2011) は教室モデルと他の指導法の併用を提案している。ひとつは異文化に類似した生活環境を経験するシミュレーションモデル、さらに異文化の人々との相互行為を通して外国文化での生活や就労が抵抗感なくできることを目指す相互行為モデル (Chen & Starosta, 1998) である。

指導法のみならず、指導内容も重視する必要がある。外国で開発された異文化コミュニケーション・モデルを援用しながら、外国人の異文化に対する認知や感受性を日本人に適用することが困難と考える山本 (2014) は、日本人被験者を対象とした実証研究で、日本版の異文化感受性の発達段階を提案した。背景にある Bennett (1986, 2011) が提唱する異文化感受性の発達モデル (Developmental Model of Intercultural Sensitivity, 以下 DMIS) では、異文化感受性が培われていない自文化中心主義に基づく3段階、また異文化感受性が発達するなかで現れる文化相対主義に基づく3段階があると言われる。

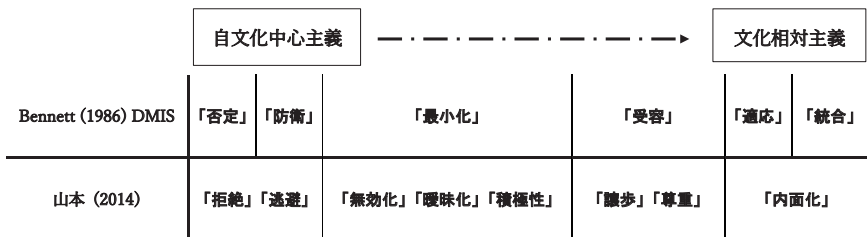
自文化中心的な段階では、自分自身の文化の観点より、他の文化を認識する傾向を指し、その3段階には「否定」「防衛」そして「最小化」がある。この段階では、自文化の世界観が全ての現実の中心にあり (Bennett, 1986) 他文化との間にある差異を「否定」することが現れる。その原因として他文化からの分離や孤立 (Bennett, 2011) が挙げられる。次に、他文化に対し「防衛」が現れる場合、自文化を称賛し、他文化を中傷する (Bennett, 2011) などの行動が見られる。差異を「最小化」する

こととは、他文化を表面的には認識する一方で、無意識に自文化を押し付けることでもある。DMIS では自文化中心の段階から文化相対的な段階に変わる中間点として位置づけられるのが「最小化」である。

文化相対的な3段階には「受容」「適応」「統合」がある。「受容」では自文化中心のなかから文化相対的な考えへの移行 (Bennett, 1986) の段階であり、他文化との差異を認識し尊重するようになる。「適応」では自らの物の見方を意識的に変えた結果、行動も変わる段階と言われる (Bennett, 2011)。異文化感受性の最終目標と言われる「統合」では、かつては他文化に対する「受容」と「適応」が充分に発達した際、到達する段階であると同時に、特定の文化との同一化や帰属意識がないと言われた (Bennett, 1986)。しかし、現在では「統合」においては、より幅広い文化的観点や行動様式を持てると見做されている (Bennett, 2011)。

山本 (2014) によると DMIS ではアメリカ人や日本人など文化の種別にかかわらず、同じ異文化感受性が適用されるという前提に立っている。ただし DMIS はアメリカ人被験者を対象としたモデルである。そこで山本 (2014) は日本人対象者に行った量的調査 (因子分析) を実施したところ、Bennett の DMIS とは異なる図1のカテゴリーが抽出された。

図1 異文化感受性モデル 自文化中心主義と文化相対主義に基づく段階



DMIS の「否定」「防衛」に対応するカテゴリーを山本 (2014) は「拒絶」「逃避」と命名した。「拒絶」とは異なる文化の相手との違いを拒絶して接触を回避すること、また「逃避」は相手との違いに直面することを回避することを指す。

DMIS における「最小化」に関しては、山本 (2014) の分析から複数のカテゴリーが抽出された。まず「無効化」では、相手との違いを認識しつつ、その違いから

の影響力を無効化し、やり過ごすことである。「曖昧化」とは、相手の文化との違いを意識せず、境界をぼやかしながら関わることであり、また「積極性」では、相手との違いを積極的に探し、興味を持つことを指す。さらに「曖昧化」と「積極性」は相手との違いを克服するための段階である。

DMISの「受容」においても、山本(2014)では複数のカテゴリーが抽出された。「譲歩」では相手との違いに向き合いながら折り合いをつけようとし、「尊重」とは違いを認めつつ相手を尊重することである。これらのカテゴリーは自文化的と文化相対的な世界観を結びつけるものである。最後の「内面化」では相手との違いを吸収し、また自らの考えを見直しながら枠組みを組み立て直すことも含む。

Bennett(2013)は異文化感受性とは、直線的な段階で発達するものではないとしている。たとえば異文化感受性の発達が見られても、その後、経験したことが原因で、自文化中心的な段階に戻ることもある。

3. 調査方法

3.1 参加者

本調査は2017年後期より、交換または認定留学生として派遣された本学生を対象に行われた。2017年5月に開催された派遣学生対象のオリエンテーションに出席した筆者が、調査の主旨を説明し参加者を募ったところ、出発前の質問紙調査には表1の学生の協力を得ることができた。尚、本調査では、個人が特定されないために所属学部はアルファベットに置き換え、各学部の参加者数に相当する番号を無作為に付与した。

3.2 質問紙調査

参加に同意した学生には対し、インターネットで作成した質問紙の調査を2回実施した。1回目は、2017年秋からの留学開始前(2017年7月)、2回目は、2018年に留学期間を終了し、帰国後(2018年8月～9月)に行った。回答方法は山本(2014)より選択した59項目に対し、1の「大いに思う」から6の「全く思わない」まで、該当する数字を選択する6件法である。その内訳は「拒絶」8

表1 2017年度秋派遣留学生 質問紙調査参加者13人一覧表

学部及び番号	性別	学年(出発当時)	派遣先(地域)
E1*	女子	3年	ヨーロッパ
E2	女子	3年	ヨーロッパ
L1	女子	3年	アメリカ
L2	女子	3年	アメリカ
L3*	女子	3年	中国
L4	女子	3年	中国
L5	女子	2年	ヨーロッパ
L6	女子	2年	ヨーロッパ
J1	女子	3年	ヨーロッパ
N1*	男子	2年	アメリカ
N2	女子	3年	アメリカ
N3*	女子	2年	アメリカ
N4	女子	2年	アメリカ

註： E=経済学部 / L=文芸学部 / J=法学部 / N=社会イノベーション学部。
アスタリスク (*)は面談調査の参加者を示す。

項目、「逃避」7項目、「無効化」10項目、「曖昧化」5項目、「積極性」9項目、「譲歩」7項目、「尊重」3項目、「内面化」10項目である。表2では項目の一部を示している。8カテゴリー以外に山本(2014)は他に「違いの内面化」「無所属感」および「違いへの憧れ」の3カテゴリーを抽出したが、質問項目が少ないため本調査には含まれない。カテゴリーごとに留学開始前と終了後の平均の差を調べるために t 検定を行い、留学中の経験が参加者の異文化感受性に与える影響を検証した。

本調査を行う前に、同じ質問紙を用いた予備調査を『留学準備演習』(半期科目)に2017年度後期に履修登録した受講生のうち14人に実施した。授業開始時と授業終了時の15週間で異文化感受性の発達が見られるか t 検定を行った。予備調査の結果、「積極性」は開始時(平均=3.16, 標準偏差=0.37)が終了後(平均=2.64, 標準偏差=0.45)よりも平均が「大いに思う」に近づき、唯一、統計的に有意なカテゴリーだった。これにより受講生は異文化に対し、違いを克服しようとする「積極性」が発達したと考えられるが、他のカテゴリーは統計的に有意ではなかった。

表 2 質問紙調査 質問項目 (山本, 2014 参照)

【拒絶】

「価値観や行動の基準に自分と違うところがある場合、可能であればつきあいたくない」

「一緒に達成すべき共通の目的や目標がない相手の場合、その人たちに関心が持てない」

「想定外のことを言われたり、されたりすると内心むっとする」 …など計 8 項目

【逃避】

「価値観や行動の基準のことで相手とのやり方に違いを感じてもどうすれば良いかわからない」

「価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面しても、理解したいと思わない」

「一人一人違うので集団単位での文化の話には違和感がある」 …など 7 項目

【無効化】

「価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面した時、仕方がないとあきらめる」

「違いを乗り越えられない場合、相手の人間性の問題」

「違いに直面した時、嫌な所にはわざわざ触れない」 …など計 10 項目

【曖昧化】

「周りがほとんど外国人でも、そもそも相手のものの見方や行動の仕方の違いに気がつかない」

「国の単位で見て、その集団に特徴的な行動パターンや考え方の傾向があるというのは間違いである」

「基準が異なることが原因でトラブルが生じたとしても時(時間)が解決してくれる」 …など計 5 項目

【積極性】

「見方ややり方が違う人たちにかかわった結果、その見方ややり方を実践できるようになった」

「価値観や行動の基準のことで相手との違いに直面したとき、わくわくする」

「外国人の人たちと積極的に関わっていききたい」 …など計 9 項目

【譲歩】

「価値観や行動の基準が異なる相手に対して、自分から合わせることでトラブルを未然に防ごうとする」

「価値観や行動の基準に自分とは違うところがある人だからと、割り切るようにする」

「価値観や背景の異なる相手が大勢の中では、多少の居心地の悪さは受け入れる」 …など 7 項目

【尊重】

「取り入れて実践するまではいかないが、相手の見方ややり方がどう違っているのか認識し尊重する」

「価値観や行動の基準が異なることが原因で生じるトラブルから、多くのことを学べる」 …など 3 項目

【内面化】

「見方ややり方が違う相手に触れて、自分の固定観念が崩された経験をしたことがある」

「見方ややり方が違う人に触れると、どんな所が違い、どんな共通点があるのか、きちんとわかりたい」

「他集団に合わせ日々自分のモードを切り換えている」 …など計 10 項目

3.3 面談調査

質問紙調査の結果だけでは現れない参加者の経験や考えを探るために、面談調査も実施した。面談調査、つまり参加者との対話を行うことは、参加者目線であるイーミックな経験（抱井, 2015）を導き出すという利点がある。

本調査に協力した参加者の中から 2 回目の質問紙調査の終了後、2018 年 11 月に、4 人の学生の面談調査を実施した。4 人には表 3 の項目を中心に質問をしながら、1 人につき 40 分から 60 分の半構造インタビューを行った。語りを書き起こした後に、各参加者の語りに現れた 8 カテゴリー「拒絶」「逃避」「無効化」「曖昧化」「積極性」「譲歩」「尊重」「内面化」に関連する内容を、先行研究と比較しながら考察した。

表 3 半構造インタビュー 質問項目

「留学に行きたいと考え始めたのは？きっかけは？」
「いつごろからどのような準備を始めたか？」
「それまで海外に行ったことはあったか？」
「留学の目的は何だったか？それは達成できたか？」
「異文化や出身国が違う人に対して、どのような印象を持っていたか？」
「自分と考え方が違う人に対して、どのように接していたか？」
「自分と合わない状況があった場合、どのように対応したか？」
「しっくりこない状況には、どのように対応したか？」
「自分と考え方が違う人とも積極的に関わりあうためには、どのようなことをしたか？」
「出身国も考え方も違うから仕方ないな、と思えるようになるために何かしたか？」
「自分と考え方が違う人を受け入れられるようにするために、どのようなことをしたか？」
「帰国して、今後、どのように留学経験を生かしたいか？」
「今、振り返って、留学前に十分準備はできたと思うか？」
「成城大学では今後、海外に留学する学生に対して、どのような留学準備をすればいいか？」

4. 結果

4.1 質問紙調査質問項目の t 検定

質問紙調査には 13 人が参加した。山本 (2014) の 8 カテゴリーに関して、参加者の回答を留学開始前と終了後の平均の差を有意水準 5% で両側検定の t 検定を行った。その結果は表 4 の通りであり、いずれのカテゴリーにおいても平均の差は統計的に有意ではなかった。

表 4 2017 年度秋派遣留学生留学開始前と終了後 8 カテゴリーの平均の差の検定結果

カテゴリー	留学開始前 (n=13)		留学終了後 (n=13)		$t(13)$	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t	p
拒絶	4.36	0.61	4.52	0.17	0.94	0.36
逃避	4.43	0.73	4.34	0.78	0.35	0.73
無効化	3.17	0.79	3.36	0.91	0.71	0.49
曖昧化	4.36	0.61	4.52	0.62	0.94	0.36
積極性	2.33	0.62	2.3	0.67	0.16	0.87
譲歩	2.46	0.94	2.52	0.84	0.28	0.78
尊重	1.74	0.77	1.63	0.67	0.55	0.59
内面化	3.03	0.47	2.73	0.62	1.89	0.08

注: 有意水準 5% とした両側検定

DMIS の異文化感受性が発達すると、自文化中心的な「拒絶」「逃避」「無効化」「曖昧化」「積極性」のカテゴリーは留学開始前と比較すると、終了後の平均は「全く思わない」の 6 に近づくのではないかとと思われる。また文化相対的な「譲歩」「尊重」「内面化」は、終了後には「大いに思う」の 1 により近い平均のではないかとと思われる。ところが本調査の留学開始前と終了後の平均を比較すると、山本 (2014) が特定したカテゴリーごとに推移のばらつきがある。

たとえ t 検定で留学開始前及び終了後のカテゴリーの平均の差は有意ではないものの、発達がみられないと断定はできない。なぜならば、その背景には数字に現れない参加者の経験、それも留学中のみならず、留学前の経験も含まれると考えられる。

4.2 面談調査の結果

質問紙調査参加者 13 人に対し、さらに面談調査の協力を要請したところ 4 人が承諾した。面談調査の参加者は、表 1 に示されたアスタリスクがついている E1、L3、N1、N3 の計 4 人である。

面談調査を始める前に、まず 4 人の質問紙調査の結果を確認し、留学開始前と終了後のカテゴリーの平均の差を比較しながら、特徴があるカテゴリーに注目した。その上で、表 3 の質問以外に関連するカテゴリーについても尋ねた。以下、E1、L3、N1、N3 の順で結果を紹介する。

4.2.1 参加者 E1

E1 は経済学部在籍の女子学生である。交換留学でヨーロッパに渡ったのが 3 年次後期であり、面談は 1 年後の 4 年次後期に行われた。筆者は E1 が渡航する前より面識があり、英語のライティング指導も数回行ったことがあった。また E1 からは留学先からもクリスマスカードを受け取り、4 人の面談協力者の中では、接触回数が最も多かった。E1 の留学開始前及び終了後の 8 カテゴリーの平均は表 5 に示す通りである。

表 5 参加者 E1 記述統計

カテゴリー	留学開始前		留学終了後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
拒絶	3.63	1.51	3.88	0.83
逃避	4.71	1.25	4.25	1.25
無効化	3.1	2.08	4.2	1.31
曖昧化	5.4	1.34	4.4	0.55
積極性	2.0	1.66	3.11	1.7
譲歩	2.86	1.95	2.85	1.34
尊重	2.33	1.53	2.33	1.53
内面化	2.6	2.36	2.9	1.8

E1 は高校時代にニュージーランドに1年間の留学経験があったものの、特に異文化交流に興味があったわけではなかった。それ以上に興味を持っていたのは、外国人の労働問題だった。

「どうやったら自分が、海外労働者に、海外から来る労働者に職を奪われなくて、逆に自分が雇ってやっていけるのか… その人たちがもしかして部下として来るかもしれないし、上司として来るかもしれないし…」

E1 は留學生活で紆余曲折あったと話し、その中でスペイン人留学生と喧嘩をしたエピソードを語った。きっかけは授業のグループワークをするためのスケジュール調整だった。

「相手と話しているときに、相手に予定を聞くんですね… 私の予定だけ言ってもあれなので、最初にその方の予定をお伺いしようと思って… お伺いしたところ、自分の予定は言ってくれるんですね… ただ自分のことしか考えていなくて【私の予定はこうだから、こうしましょう】になるんですね。だから私は相手に【あなたの予定はわかるけど、私の予定もあるんだから、そこは考慮してもらわなきゃ困る】となって、喧嘩になりました。」

さらにスペイン人留学生との喧嘩のエピソードに折り合いをつけるため、倫理観の違いがあることに納得した。その一方で、E1 はその出来事がきっかけで、考え方が異なる人を不可解に感じ、理解しあうことが難しいという結論に至った。

「まー、10代後半から倫理を始めるような国の人… そういう人ではわかりあえないな、と思いました。要はですね… 幼いころから、倫理とかそういうことを勉強している自分たちと、その16歳、18歳から倫理の勉強をしている人とは、やはり環境とか、考え方がもっとも違うと思います。要は、気の遣い方が… 日本人は、ここをこうやっておいては大丈夫だ、というポイントというのはあると思うんですけど、16歳、18歳から始まった国の人では、

多分、ポイントがわからないと思うんですね。」

E1 は日本でも慣れていないコミュニケーションのスタイルを、留学先で初めて目の当たりにし、経験したことの衝撃も大きかった。

「自分、強く言うってことは基本しないほうなので、やはりあのねー、怒鳴るとか、好きじゃないので… 日本にいるときも、そういうふうに感情的になる友人は周りにいないので、さすがにびっくりしちゃって。(スペイン人は)感情的ですね。私より英語がうまいのに、人の話を聞かないし、ちゃんと最後まで読まないって方ですね。見た感じ、そんな感じでした。」

E1 はスペイン人留学生との衝突のエピソードが随分印象に残ったようで、面談の最初の 30 分がこの経験の語り終始した。コミュニケーションが困難だったのは相手が英語を母語とない外国人留学生だった可能性もあると考え、母語が英語である学生とのコミュニケーションについても尋ねてみた。自称、英語が苦手という E1 は大学の寮に住んだが、そこでもコミュニケーションにも苦労があったようだ。ある時、E1 は次のようにルームメイトに伝えた。

「こっちは英語がわからないので、まー、そうですね。【私の英語を理解して】って… 【ネイティブじゃない人の英語を理解することに努めて欲しい】というのを願いました… 【ジャスト プリーズ アンダースタンド マイ イングリッシュ…】 …もうそんな感じで」

E1 が持つ外国人に対する印象が、留学先での苦い出来事がきっかけで変化し、悪印象を持つようになった可能性もあると考え、留学前に本学で外国人留学生との接触についても尋ねてみたが、特に出発前は積極的に関わらなかった。

「海外から日本に留学されている方って、日本のことを、すごく良いって思っ
て来られる方がいて、非常に自分としては嬉しいんですね… ただそれに乗

じて、英語のまー、会話の練習をするっていうのは、自分はどうも、その方たちの日本語学習の影響をする、妨げてしまうんじゃないかと思ったりとか」

しかし留学先で過ごす時間が長くなるにつれ、E1 も授業のグループワークで自信がつき、後期の授業では教授から高評価も得られた。当時の画像を USB に入れて持ち歩くと語った E1 は、その時に経験したグループワークを作りあげるプロセスをバレーボールに喩えて嬉しそうに語った。

「本当は感覚でいうならば、海外の方とグループワークするときの感覚って、あの、バレーボールって感じ… トス！とか、レシーブ！な感じで、みんなでこう、パスをつなげていって、シュートするみたいな感じで… 時々、外しますよねー、人間だから。こう時々見当違いの方向に外して。でも結局何とか。みんな結構真剣で。真剣っていうか、楽しかったんですかね？」

E1 の記述統計によると、「譲歩」「尊重」「内面化」の文化相対的なカテゴリーは留学開始前と終了後では、目立った推移がなかった。しかし自文化中心的なカテゴリーの「拒絶」「無効化」「積極性」は留学終了後の平均が上がり、「逃避」と「曖昧化」は下がっている。中でも留学開始前も終了後も6の「全く思わない」を選択している以下のような質問項目があり、それがE1が留学先でのコミュニケーションを困難に感じさせる原因になった理由と推察できる。ひとつは「無効化」における「衝突時に【本質的には同じ】と考えるとうまくいく」という項目である。E1は日本にいる時から慣れていない他人との衝突を、留学中に他国からの留学生と経験したことで、E1の中では「うまくいかないものだ」という考え方が一層強化されたと思われる。また「積極性」における「むしろ外国人と人たちと一緒にいる方が気楽でやりやすい」も同様に6を選択している。気楽と感ずることはなくても、この回答にはE1が持つ外国人に対して持つ先入観が現れているとも考えられる。たとえ異文化交流に興味がないとは言え、留学する以上は異なる言語や文化背景を持つ人との接点がある状況は避けて通れないという前提を持つば、留学生活にも前向きになれ、そのためには異なる文化や世界観に触れる

ことも重要であろう (Bennett, 2013)。

4.2.2 参加者 L3

L3 は文芸学部に籍を置く女子学生である。英語教育を専門とする筆者は、当初、英文学専攻であるにもかかわらず、中華圏に留学した L3 に大変興味を持った。面談は帰国後、3 年次後期に行われた。L3 の留学開始前及び終了後の 8 カテゴリーの平均は表 6 に示す通りである。

表 6 参加者 L3 記述統計

カテゴリー	留学開始前		留学終了後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
拒絶	3.75	1.91	4.25	1.67
逃避	3.86	2.67	4.71	1.25
無効化	2.7	1.70	4.1	1.73
曖昧化	3.6	2.51	4.0	2.34
積極性	2.44	2.07	4.0	2.0
譲歩	1.0	0	1.86	0.38
尊重	1.0	0	2.66	1.15
内面化	2.9	2.33	3.2	1.69

他の面談協力者の学生と同様、長期留学を目指すきっかけを尋ねたところ、L3 は留学が必須だった出身高校より、ニュージーランドの高校に留学経験があった。高校受験前より、留学が 1 年間できる高校への進学を決めていたようで、中国語の勉強は、ニュージーランドに留学中に始めたとのことだった。

「そもそも中国語を始めたきっかけが、そのニュージーランドの留学で。最初はその高校の… 中国語の授業を取っていて。それも日本で中学生がとるような、ベーシックなクラスを向こうで。日本人だから漢字もわかるし、やりやすいよ、ってことで、向こうで取っていたんですけど。」

その後、中国語の勉強が楽しくなった L3 は中華圏の大学への進学を目指したが、両親の希望で日本の大学に進学した。本学に入学後、中華圏に交換留学をしたいと考えた L3 は、まず休学して台湾に語学留学に行くことで、中国語の力を磨いた。そのうち、英語よりも中国語の勉強に力を入れるようになった。これは L3 の記述統計における留学開始前の「尊重」の平均が「大いに思う」と同じ 1.0 であることに現れていると解釈できる。

高校時代にニュージーランドで中国語の勉強を始め、日本語と中国語の類似点の発見に勉強の醍醐味を感じていたが、中国での留學生活が始まった頃の生活は順調ではなかった。自らの希望で中国に留学したにもかかわらず、中国語が嫌いだと感じた時もあった。その気持ちに拍車をかけたのが、中国人による L3 に対する接し方だった。

「生活する上では、もう中国語じゃないと生活できなくて。それこそ、中国語がちょっと喋れなくて、お店の注文とかでも、私がちょっと聞き取れなかったりすると【外国人なら、中国語を喋れ。中国にいるなら、中国語を喋れなきゃだめだよ】とか言われたりして… ちょっと嫌だな、って思ったりする時期はあったんです。」

しかし中国語が好きで留学した L3 は、中国語が上手になりたい気持ちが一層強くなり、その困難を徐々に乗り越えられるようになった。

「【だったら喋れるようにならなきゃ】っていう気持ちが半分だったので… 行ったばかりの時期はそうやって言われて、すごい折れそうになる時のほうが多かったんですけど、段々その環境にも慣れてきて、中国人の性格にも慣れてきて、心が強く持てるようになったので、嫌だな、と思うのは減っていききましたね。」

最初の半年間に住んだアパートの前にあった食堂のオーナーも、当初は厳しい口調だったが、L3 はその店に通い続けたので、少しずつ打ち解けた。

「やっぱり中国人って、そういう人だけじゃないんだな、っていうのがわかったって。あとは、もう嫌がられても、しつこく関わり続ければ、きっといつかは優しくしてくれるんだな、って思っで。」

L3 は時間をかけて中国人とも打ち解けられるようになったことで、どのような相手とも誠意を持って関われば、分かり合える間柄になれるとの確信を持った。それと同時に L3 自身が中国人への偏見を払拭することで、中国人が外国人に対して持つ偏見を取り除くことに有効であり、コミュニケーションを取ることによって理解できることがあることに気づいた。

「中国に行って、自分の意識が変わった、っていうのが大きいですね。」

L3 の記述統計では、8 カテゴリーのうち 5 カテゴリー（「拒絶」「逃避」「無効化」「曖昧化」「積極性」）において、留学終了後の平均が 4.0 以上で、開始前より「全く思わない」に近づいていることが特徴として挙げられる。語りにもあるように、中国人との交流を通して、心が通じ合うことができた達成感の現れだと思われる。その一方で、文化相対的なカテゴリーである「譲歩」「内面化」には大きな差がない。ただし留学開始前の平均が 1.0 だった「尊重」は終了後、2.66 に推移している。その原因は 3 つの質問項目のうち「価値観や行動において違いがあることで、これからも互いに衝突するかもしれないが、その違いは失わずに持っていて欲しい」（山本, 2014, p.78）の回答が留学開始前は 1 だったのが、終了後は 4 に推移した。中国での苦い経験を乗り越え、自分の意識を変えることができたので、他人でも意識を変えることができる、という L3 の希望の現れだと思われる。

4.2.3 参加者 N1

N1 は社会イノベーション学部に籍を置き、今回の調査に協力した唯一の男子学生である。交換留学先はアメリカの大学であり、面談は帰国後、3 年次後期に行われた。N1 の留学開始前及び終了後の 8 カテゴリーの平均は表 7 に示す通りである。

表7 参加者 N1 記述統計

カテゴリー	留学開始前		留学終了後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
拒絶	4.63	0.52	5.25	0.71
逃避	4.86	0.69	5.29	0.76
無効化	4.2	0.42	5.5	0.71
曖昧化	4.2	0.45	4.6	1.14
積極性	3.11	0.6	2.44	1.13
譲歩	3.86	0.69	4.43	1.27
尊重	3.0	0	2.33	0.58
内面化	3.6	1.07	3.2	1.23

N1 に留学に行きたいと思ったきっかけを尋ねたところ、中学時代に姉妹都市があるカナダのプログラムに参加し、高校でもオーストラリアで1ヶ月間の短期留学をした経験に触れた。N1 は中学時代の経験を以下のように語った。

「ホームステイみたいなので、一週間、交流で行って。その時に、本当に英語ができなくて… みんな周りは結構、喋って楽しそうにしているのに、自分は全然喋れなくて… 交流もイマイチできなくて。何か、結構悔しい、じゃないけど… あー、楽しめなかったな、みたいなのがあって。それから英語は頑張ろう、みたいなのがあって、それが英語を頑張るようになったのが、最初のきっかけでした。」

その後、頑張ってきた英語を試す気持ちで、高校の短期留学では積極的に現地の人とも交流ができたことで達成感を得たものの、N1 は物足りなさを感じた。そのため大学では長期留学を目指したいと感じた。そこで N1 は、大学入学後に英語力を身につける以外に、文化圏によって商品の売り方が違うことを理解し、ビジネスに活かしたいという目標を設定した。そのため、文化等の深い理解を得るために実際に外国で暮らし、長期留学を志した。

留学したのはアメリカの大学ではあったが、実際はアメリカ人以外の学生との

交流が多かった。

「何かアジアの人とかかわる機会が多くて。やっぱり親しみやすいとか。特に韓国人とか中国人の人とは、すごい仲良くなって… そのほかに勿論、アフリカの人とか、ホントに結構幅広がったですね。」

さらに N1 の留学生活の中心となったのは、スモール・グループと呼ばれる勉強会の存在である。そのグループは、クリスチャンの韓国人学生がリーダーとして、キリスト教や世界における諸問題について勉強したり話し合う会であると同時に、N1 が他の学生との友人関係をつくる土台にもなったようだ。

「キリスト教のことだけじゃなくて、世界の人種のこと、そういうことについて話すことも多くて。10 人ぐらいのグループだったんですけど、なかなかそういうトピックって話しづらいじゃないですか。でもそこでは、結構気を遣わずに、みんな思ったことを話していい場で。」

N1 にとり、そのグループの居心地が良かったことには、2つの理由が挙げられる。まず N1 のようにノンクリスチャンでも、押し付けられることも勧誘をされることもなく、さらに勉強会終了後に食事をするなど、参加者と親しい間柄になれたことである。多彩な参加者の集まるスモール・グループでの学生との出会いを通して、異なる考えを持つ相手をどのように受け入れるか、など自分なりに答えを出したようである。

「そういう話をしていく中で、それはお互いに違うように思ってもいいことなのかな、と思えて。向こうは向こうでそういう教育を受けていた… こっちはこっちで、日本の情報しか得ていない、って思えば、自分がすべて正しいと思っていたことは、すべてそうじゃないかもしれないし… だから自分がすべて正しい、とかじゃなくて、相手には相手の正しいことがあるかもしれないし… いろんな考え方があって、それをお互いに伝えることは大事だ

けど、じゃ、それをひとつに決めよう、とする必要は別にないのかな、って思う時はありますね。」

N1 の柔軟性を持った考え方は、留学中の交友関係にも表れていると言える。それは日本人と付き合うことを避けることもなく、同じ国の人と付き合うことはむしろ自然なことを捉えていたようである。N1 の記述統計を見ると「拒絶」「逃避」「無効化」の留学終了後の平均は「全く思わない」に近づいている。前述のように、N1 は参加したスモール・グループでの異なる考え方を持つ学生との交流を通して、異文化に対する抵抗感が薄れていると解釈される。また「曖昧化」は他の3カテゴリーほど平均は推移していないが、これは自分と相手の異なる考え方どのように折り合いをつけようとしているかを振り返る語りに現れている。

N1 は楽しかったこと以外にもチャレンジングなことも経験した。そのひとつが留学先の大学での授業だった。日本では受け身だった大学の授業も、アメリカでは難易度が高くなったものの、発言することで自分の考えや思いを伝えることができるようになった。

「前期は多めの人数の100番台の簡単なヤツなので、大きな教室でやっている授業が多かったんですよ。後期は300番台、400番台というのを取って見たら… 難しくて。結構小さい教室で、何かディスカッション中心みたいなヤツがあって。積極的になんでも話さないとダメみたいな感じのヤツで… やっぱり何も自分から発信しなければ、向こうは別に構ってくれないんで。」

この語りにはN1の「積極性」が現れていると思われる。これは授業に対し日本のときのような受け身な授業参加ではなく、アメリカの授業についていくためには必要な「積極性」であり、山本(2014)が記すように文化相対的な段階への移行の後押しをしているようである。そのために留学終了後の平均は「大いに思う」に近づいていると思われる。

当初は英語のレベルの高さをはじめ、予習や復習にかける勉強時間が平日は長かったものの、暫くすると効率よく勉強できるようになり、週末には余暇にも時

間を割けるようになったようである。

「勉強も大事ではあるんで… だからそれもやりつつ… また色んなほかに
もやりたい事あるし。勉強もあんまり頑張りすぎても、せっかく行ってるん
だから、色んなとこ旅行したりして、色々楽しみたいし… って言って、そ
このバランスじゃないですけど、大きいです。」

最初に楽しい思い出から話が始まった N1 に対し、プラスのこのの方がより多
かったのか、と尋ねると、次のように答えた。

「ま、大変だったことも含めて、すごい充実感じゃないですけど、なんかあ
れだけ勉強もできて、さらに、勉強だけでなく、遊ぶこととか、そういう交
流とか経験というのができて、充実っていうのか、本当に大きいので… ま、
トータルですべて含めてプラス、じゃないですけど。」

4.2.4 参加者 N3

N3 も社会イノベーション学部に着く女子学生である。筆者は渡航前より
N3 に英語のプレゼンテーション指導をしたことがきっかけで多少、面識があり、
留学出発前から積極的な学生という印象を受けた。交換留学先はアメリカにあり、
語学要件である IELTS のスコアが 6.0 以上の難関校である。面談は帰国後、3 年
次後期に行われた。N3 の留学開始前及び終了後の 8 カテゴリーの平均は表 8 に
示す通りである。

N3 に長期留学を目指すきっかけを尋ねたところ、出身高校の姉妹校(アメリカ)
への 2 週間の短期留学プログラムへの参加経験であった。

「ただ漠然と、海外に憧れがあって… その話があったときに【あっ、じゃあ、
ちょっと私、楽しそうだから受けてみよう】と思って、選考試験を受けて。今、
思うと、本当になんで受かったんだろう？って言うか、英語できなくて、その時。」

表 8 参加者 N3 記述統計

カテゴリー	留学開始前		留学終了後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
拒絶	5.25	1.16	5.0	1.6
逃避	5.71	0.76	5.29	0.76
無効化	4.2	1.75	3.2	1.87
曖昧化	4.2	1.30	2.4	2.2
積極性	1.78	1.2	1.67	0.87
譲歩	4.0	1.41	2.0	1.0
尊重	3.0	0	1.0	0
内面化	2.6	1.71	2.0	2.11

しかし、高校時代の短期留学だけでは不十分だと N3 は気づいた。

「自分の限られた、知っている世界の中で、その自分の出した成果みたいなものに、満足していたってことに気づいて。自分の知らない世界、っていうのは本当に広いし。で蓋を開けてみたら、自分より優秀な人って、すごいいっぱいいるんだな、ってことに気づいて。」

アメリカに優秀な学生がいることで、自信を失うのではなく、それがむしろ良い刺激となって、さらに N3 の動機づけが強くなったと言っても過言ではない。彼女の言葉は自信が満ちていたものの、その話し方には謙虚さも見られた。

「私、挑戦したら、絶対できる気がする、みたいな感じに思っ… やっぱり結果はどうであっても、やらないで後悔するより、やったほうが良いと思っ… て。」

それがさらに N3 の中で大学在学中に長期留学にチャレンジしたいという気持ちに繋がった。その後、本学に入学直後に国際センターを訪れ、マレーシアでのインターンシップや長期留学への準備を早い段階より開始した。

そして2年次後期より交換留学で勉強したアメリカの大学では、時間をかけ、現地の学生等とのコミュニケーションを通して理解できたことを次のように話した。

「体験というか、日々の中で過ごしている時に、なんか価値観とか、そのコミュニケーションの仕方って、民族とか国とか、自分が生まれ育ったバックグラウンドで異なる、っていうのに気付いて。例えば、私は日本で生まれ育ったから、その日本人のコミュニケーションのし方があるし… アメリカ人のアサーティブネスっていうか、すごくいいな、と思うところもあったけど、日本人の私としては、それを不快に思うところもあったし… グローバル化って謳われていますけど、それって自分を殺して、世界の人とかかあるんじゃないかって、なんか私の日本人のアイデンティティーを持ったうえで、世界の人たちと対等に渡り合っていくってことなのかな、って思うようになりました。」

N3の記述統計にも見られるように、語りには「拒絶」「逃避」を思わせる内容は感じられなかった。むしろ文化相対的な段階への移行途上の「無効化」と「曖昧化」においてN3の異文化感受性の発達が見られ、留学終了後には2つのカテゴリーとも平均に推移がみられた。それはN3が自分の日本人のアイデンティティーを大切にしながら、それでもアメリカに留学している立場として、どのように異文化と折り合いをつけるか試行錯誤しながら、自分が日本人としてすべきことを導き出せたと解釈できる。

その一方でN3はアメリカ人の良さも融合したコミュニケーションのあり方にメリットや潜在性を見出す、以下のようなコメントもした。

「日本人って本当に意見を言わな過ぎるし… 会議の場でも長に同意することが一般的だけど。でも、あつちは、みんなが対等な立場で意見を出し合えるから、なんかもっとひとつの意見、ひとつの議題について話し合うにしても、すごいクリエイティブになるんですよ… 日本人となんかアメリカ人の、そ

の間があれば…」

N3 に前述のような中間点を見出すためにの話しを、アメリカで誰かと具体的に
にしたことがあるか尋ねたところ、寮で同室だったアメリカ人のルームメイトと
の次のエピソードを語った。

「ルームメイトが…【あなたは意見を言いなさすぎるよ】と言われて。その時、
留学の初めの方だったから【でも日本人は言わないんだから】…日本人の特
性みないなのを言ったんですよ。謙虚であって、だいたい人にフォローす
るし、自分の考えていることをあからさまに出さない。それが that's how we
are みたいな感じで言ったら、【でもあなたが、ここで生きていくためには、
自分の意思表示もしなければダメだ】と言われました。」

さらに、N3 は、ルームメイトとの上記のやり取りがきっかけで、アメリカ人ほ
ど頻繁ではないものの、好きなことには yes また嫌いなことには no というなど、
自分をさらけ出すようになった。

これらの語りには「**譲歩**」そして「**尊重**」が現れており、どちらのカテゴリー
も留学開始前と比較すると、終了後の平均が2ポイント推移し、「大いに思う」
に近づき、N3 自身の文化の異なる相手とのコミュニケーションの折り合いをつ
ける、また相手のやり方を受け入れる度合いの高さが見受けられる。

当初は慣れなかったものの、N3 はアメリカでは大学の授業中も含め、徐々に
「思いついたものは、全部出すようにした」と語る。しかし自分を出すことに慣
れていくにつれて、僅か1年の留学生活から帰国後に日本での生活に適應するこ
とが新たな課題になった。

「私は留学する前は… 留学に行って、何かを学ぶ。日本人とアメリカ人の
違いについて学ぶ、で終わりだと思っていたんですけど。いや、今度は日本
に帰って来て、自分が日本人なのに、日本に帰って来て、こういうことで葛藤、
まではいかないんですけど、ちょっと confusing になるのは、考えていなかっ

た。」

帰国後に葛藤があったものの、留学中に経験した挫折や挑戦が、N3 の成長に繋がったことは確実である。その手応えを次のように語った。

「授業でもプレゼンとか、ディスカッションする時に、それでも劣るけど、その場にいることが、なんが uncomfortable じゃなくなったところに、すごい成長を感じたり… その非日常だったことが、自分の日常として、固定化して、それを自分が難くこなせるようになった時に、ホントに何か嬉しくて… やっぱり挑戦して、成長するサイクルって、ホントになんか楽しいな、と思ってる」

5. 考察

本研究では、2017 年度後期に本学から長期留学した学生の異文化感受性の発達を明らかにするために、まず山本 (2014) の 8 カテゴリーの項目を含む質問紙調査を実施し、留学開始前と終了後の平均の差を調べるために t 検定を行った。次に 4 人の参加者の面談調査の語りを前述の 8 カテゴリー「**拒絶**」「**逃避**」「**無効化**」「**曖昧化**」「**積極性**」「**譲歩**」「**尊重**」「**内面化**」に関連づけて分析した。

まず、いずれのカテゴリーも統計的に有意ではなかったという本調査の限界について触れる。本学では 2017 年度の後期より長期留学した学生数が 23 人であり、本調査の参加に合意した学生数はさらに少ない 13 人であったため、量的調査を行うためのサンプル数が少なく、 t 検定の結果が統計的に有意でなかったと考えられる。それと関連するのが、山本 (2014) の質問項目のように人間の行動や内面を数値で表し、「合理的な結論」(石田, 2017, p.39) を導き出すことの難しさである。特に留学開始前は、長期留学前に海外旅行や滞在経験がない学生の場合、想像 (Kowner, 2002) 及び強い感情 (Cushner & Brislin, 1996) に基づく回答もあると考えられる。さらに留学開始前と終了後の回答には 12 ヶ月以上の時間の経過があるため、参加者が同じ質問項目に回答する際、イメージする場面が異なる

可能性が高い。当然、留学中の経験が異なるため、6件法で同じ数字を選択しても、質問項目の記述内容が参加者一人一人にとり持つ意味が変わることも否めない。上記のように量的調査の限界を前提に、面談調査を実施した。4人の参加者に対し、留学開始前と終了後の様子の聞き取りを行ったが、面談の時間が限られているため、垣間見えたのは、参加者の1年間の留學生活の一部に過ぎない。その内容を一般化し、8カテゴリーを当てはめることも難しい。

だが本研究の目的である、参加者の留学開始前と終了後の異文化感受性の変容を比較し、その分析内容を『留學準備演習』に反映するための示唆も与えられた。まず、2018年度前期に開講された『留學準備演習』の指導内容(武田, 2018, p. 126)にはなかった異文化コミュニケーションの概念のひとつである高文脈文化・低文脈文化(Hall, 1976)を、4人の参加者への面談調査終了後、早速、授業に追加した。Hall(1976)によると、高文脈文化におけるコミュニケーションでは、伝達される情報が記号化されず、さらに明示的でないため伝わりにくい。一方、低文脈文化では、文脈で不足している情報は明示的に言語化するコミュニケーションを取る。

参加者の語りで現れた、例えばN3がルームメイトに【あなたは意見を言いなさすぎるよ】と言われたやり取り、またE1のスペイン人留学生との衝突などは、日本人に見られる高文脈文化に基づくコミュニケーションを変えざるを得ない出来事である。E1は強く言うことを好まないと話していたが、率直に自分の意見や気持ちを伝えることに慣れていないとも考えられる。これは個人的なコミュニケーションに限らず、留學先の大学の授業でも起こり得る状況である。N1の語りにあるように、「何も自分から発しなれば」留學先の大学の教授やクラスメイト等は別に構ってくれない、とのことで授業への参加のみならず、成績にも影響しかねない。そこで高文脈文化・低文脈文化の概念を指導内容に含むことで、留學するには語学力以前に、明示的なコミュニケーションが求められることの重要性、そして演習を通して徐々に身につけることが可能だと伝えた。

さらにBennett(2013)は留學を含む海外渡航予定者に対しては、出発前より外国語学習以外に、異なる文化や世界観に触れ、それから行動様式のトレーニングを実践することの重要性を提唱する。異なる文化や世界観を持つ人との接触を回

避して外国で過ごすことは困難であり、根本的に他人との関係を構築することに興味を持つこともさらに重要となる。勿論、L3 のように努力して勉強している中国語が現地の中国人に通じないこと、また E1 のように日本人である自分の英語を理解してもらえるよう努力してほしいと現地のルームメイトに訴える以外にも、語りには現れない多くの苦労もあったに違いない。しかし N3 も語るように、「非日常だったことが自分の日常として、固定化すること」に成長を感じることは、4 人の参加者の選択する言葉や表現に違いがあっても共通して実感したに違いない。

6. おわりに

本稿では、Bennett (1986, 2011, 2013) の DMIS に基づき、山本 (2014) が日本人を対象に特定した異文化感受性の発達段階を、2017 年度後期より長期留学した本学生 13 人に対して実施された質問紙調査、また 4 人に実施した面談調査の結果を報告した。さらに本学生の留学開始前と終了後の異文化感受性の変容を比較し、『留学準備演習』に反映できる可能性を探った。

4 人の参加者の語りに現れた高文脈文化・低文脈文化 (Hall, 1976) のコミュニケーション様式の違いは授業に追加してから既に 3 期目を迎える。授業ではアクティブラーニングを通して、受講生は小グループで作成する寸劇に取り組み、終了後の振り返りを行う。そうすることで教材を読むだけでは得られない受講生の感受性の豊かさ、並びに思考のプロセスの詳細さが伝わり、クラスメイト同士で互いのパフォーマンスに共感することで、さらに理解が深まると考えられる。

その一方で、面談調査の参加者の語りには兆候が現れているものの、明確に『留学準備演習』の指導に結びついていない概念もある。ひとつは問題解決 (conflict resolution) であり、近年はアジア諸国における当事者同士の人間関係維持のためには調和型問題解決のほうが、欧米で見られる競争的で対立型問題解よりも奏功している (Haslett, 2017) とのことだが、ロールプレイの実践には課題も残る。ほかに留学中に異文化に対し感受性が高まり、また広い見聞を身につけたにも拘らず、帰国後に受けた逆カルチャーショックで混乱を感じる場合もある。現在、

SIEP で帰国後の語学力維持に対応できる科目開講などの対策は取られていないが、長期留学より帰国した学生数名にゲストスピーカーとして登壇を依頼したところ、ピアである受講生からのリアクション・ペーパーがスピーカーを務めた学生のモチベーションを高めることに役立つと聞く。今後も『留学準備演習』を受講する本学生の異文化感受性が行きつ戻りつしながら徐々に発達し、目指す長期留学に結びつくことが期待される。

参考文献

- Bennett, M.J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10, 170-196. [https://doi.org/10.1016/0147-1767\(86\)90005-2](https://doi.org/10.1016/0147-1767(86)90005-2)
- Bennett, M.J. (2011). A developmental model of intercultural sensitivity. [PDF file]. Retrieved from https://www.idrinstitute.org/wp-content/uploads/2018/02/FILE_Documento_Bennett_DMIS_12pp_quotes_rev_2011.pdf
- Bennett, M.J. (2013). Intercultural adaptation. In M.J. Bennett (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication: Paradigms, principles, and practices* (2nd ed.) (pp. 83-103). Boston, MA: Intercultural Press.
- Chen, G.-M., & Starosta, W.J. (1998). *Foundations of intercultural communication*. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Cushner, K., & Brislin, R.W. (1996). *Intercultural interactions: A practical guide* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Hall, E.T. (1976). *Beyond culture*. New York: Anchor Press.
- Haslett, B.B. (2017). Transforming conflict through communication and common ground. In Dai, X., & Chen, G.-M. (Eds.), *Conflict management and intercultural communication* (pp. 98-122). London: Routledge.
- Jackson, J. (2018). Training for study abroad programs. In Y.Y. Kim (Ed.), *The international encyclopedia of intercultural communication* (pp. 1943-1952). Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.
- Kowner, R. (2002). Japanese communication in intercultural encounters: The barrier of status-related behavior. *International Journal of Intercultural Relations*, 26, 339-361.
- 石田 潤 (2017). 心理学のデータ解析における統計法上の過程について—t 検定の場合を中心に— 兵庫県立大学人文論集, 52, 33-40.
- 抱井 尚子 (2015). 混合研究法入門—質と量による統合のアート— 医学書院.
- 武田 礼子 (2018). 異文化理解を深めるアクティブラーニングの試み— 成城大学共通教育

論集, II, 123-136.

中村 良廣 (2011). 異文化コミュニケーションと実践型教育 筑紫女子学園大学・短期大学部人間文化研究所年報, 22, 103-114.

山本 志都 (2014). 文化的際の経験の認知 — 異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述 多文化関係学, II, 67-86.

付記

本研究は、平成 29 – 30 年度成城大学特別研究助成金を受けた。

謝辞

本研究に参加した 2017 年度後期より長期留学した本学生 13 人に感謝します。